



第 113 回(平成 27 年 9 月 9 日)定例会の研究発表要旨

## ルーツを訪ねて

稲穂 相川 重吉 会員



私は石狩郡当別町茂平沢という所で生まれ、弁華別小中学校を卒業しました。弁華別とは、アイヌ語でペンケチュベシナイ沢と川があり、樹木が繁っているところの意味です。小中学校時代は、ジャンプをやっていました。ジャンプ用のスキーは、桂の木で作った、三本溝の七尺八寸(二メートル以上)のスキーでした。それを担いで、フルヤシヤンツエまで行って飛びました。その後高校に行き、私はスキーをやめました。従兄弟の高橋吉二が、北海高校のスキー部に入り、純ジャンプをやっていましたので、よく大倉山のジャンプ競技を見に行きました。佐藤耕一さんや菊池定夫さんのジャンプが、今でも思い出され

ます。

### 私の曾祖父

私の曾祖父は、相川次郎吉といいまして、天保七年七月三日(1836年)生まれで、相川惣右衛門の次男として、石川県石川郡栗崎村で生まれ、北前船で千島列島や、樺太などと貿易をして、帰路に小樽で下船して、暫く、小樽で沖仲仕をしていたようです。小樽で生まれたのが、祖父の石太郎です。明治十五年一月十五日生まれです。

石狩当別町には明治三十四年に入植しているようです。小作人として入り、うっそうたる木立を、一本一本切り開いて、畑や水田を作ったようです。茂平沢とは茂平という人が最初に入植したので、その名をとって茂平沢としたと聞いています。

### 相川治郎吉について

私は子供の頃から治郎吉は、江戸時代の大泥棒ではなかったかと考えていました。しかし、実際は北前船の経営者の一人であったと聞いたときは、驚きました。BS4のテレビで、鼠小僧治郎吉は、北町奉行の手下で、良い働き手として、活躍しているのを見て、良い事だったので安堵しました。

北前船は、明治二十年頃が、最盛期であり、その後は西洋型帆船が増えてゆき、衰退していったのです。治郎吉が、小樽で下船したのは、おそらく明治十年頃であったと思われます。

### 伊達家の当別開拓

伊達邦直は、天保五年生まれで、正宗から10代目の藩主で明治元年の戊辰戦争に敗れ、明治四年に180名の移住者をつれて、当別に入植しました。当別は、原始林で密集されたところで、歩くところは、獣道しかなかった。

### 次回の予定

次回(11月11日)は、田中和夫氏「未開地の開拓と近代化、そして村橋久成」誘致運動について。および馬淵雍明会員の「Mathematica(関数グラフィック)の紹介」の研究発表を予定しております。会場は、視聴覚室です。

# 歴史よもやま話

前田 川崎 吉充 会員

## 1 石狩尚古社（俳句結社）



明治・大正にかけて鮭の漁場として「石狩」が隆盛を極めていたさなかに、「俳句結社」が存在していたこと、さらに、彼の有名な「秩父事件」の首謀者「井上傳蔵」が、この「石狩尚古社」に密かに入会し、23年間も当町に小間物商として在住していた（変名… 伊藤房次郎 俳号「柳蛙」）ことは、持筆に値する。「石狩尚古社」の業績は、当地の豪商中島家（太物呉服雑貨商）の番頭（後に養子）として、当家を支えていた「鎌田幹六」（俳号「池菱」）がリードし、明治35年に発刊している「尚古集」に3538句が、集句され札幌始め道外からも63人もの投句者があり、中央俳壇にも名を挙げていた。

小間物商として在住していた「井上傳蔵」は、かなりレベルも高く、当会で指導的人物として名を成していたが、明治44年札幌を経て北見に移住、大正7年65歳で生涯を閉じているが、死の間際に子息に対し初めて身分を明らかにしたと伝えられている。

大正・昭和に至り、石狩の鮭漁は衰退、「尚古社」のリーダ「鎌田幹六」も昭和11年死去、現在六代目中島勝久氏が当家に残る「尚古社」の数多い未整理の遺品資料を纏め、個人で建てた「尚古社」資料館で一般に公開、説明している。

## 2 薄野今昔その時代

明治維新直後に「開拓使」が着手した札幌建設で急増した労務者の対策上、止むを得ず「遊郭」の設置が急務となり「岩村通俊」大判官の勇断で「二町四方」に至る「すすきの」に建設を許可した。以後大正・昭和を経て、総合歓楽街に変貌し、戦後全国三大盛場と称せられる街が形成されたが、時代の変遷に伴い、当初の「遊郭」は随時移転を余儀なくされ姿を消していったことは特筆されてよい戦後バブル時代の飲食業店数は4000軒、現在は3500軒（観光協会26年度の推定数）に減少、ここ「すすきの」にも世相を反映した時代を迎えている。

ところで、この時代を見つめ「すすきの」の守り神とも言われている「豊川稲荷」が盛り場のはずれに鎮座しているが、境内には「薄野娼妓並び水子哀悼碑」が、元堂垣内北海道知事の題字で祭られている。「すすきの」の歴史を考えさせられる記念の場として、一見に値すること必至である。



# 分科会報告

西尾貞敏さんは昭和2年2月4日生、鉾山でのお仕事柄、当然岩石の専門家であり、大学や研究機関との深いつながりがあります。

お聞きした経歴によりますと、手稲鉾山での勤務は昭和35年12月8日～昭和46年10月までで、その後千歳鉾山昭和57年～昭和60年まで、又また請われて手稲鉾山の排水処理に当たったのです。手稲鉾山を語る時に何がなんでも一番にお名前をあげたい方です。昭和60年10月11日付け新聞をご覧ください。正に西尾さんの人柄、生き方が如実に表れています。つい数年前までは、大雪の山々にま





# 会員の広場

## 視察研修ツアーに参加して

稲穂が黄金色に染まった国道275号線を一路北へ。浦臼町にある坂本龍馬家の墓、新十津川町開拓記念館、月形樺戸博物館など、明治期の北海道開拓の足跡を辿る研修ツアー一行は、総勢34人の歴史オタク（これは失礼）を乗せ、中空知の穀倉地帯をバスで駆け抜けました。ランチタイムでは松尾ジンギスカンを食べ、サッポロビールを飲み至福の時を過ごすことができました。

新たな発見を求め、参加した皆さんの視線はむしろ郷土史研究会仲間との情報交換にあったのかもしれませんが。調査研究し尽くされた歴史であっても、視点を少し変えるとまた違った風景が見えてくると言われます。

帰り道、石狩大橋を渡る前に名著「石狩川」本庄睦夫著の碑が立っていました。朝敵の汚名を受けた、仙台支藩は（城主・伊達邦直）、石高一万四千石からわずか六十石に減封され、城主と家臣その家族四十三戸・百八十余人が新天地を求め北海道（現在の当別）に移住。薩長が支配する北海道開拓に葛藤しながら順応いく姿が描かれている。

最近「歴女・レキジョ」なる女性の出現で、各地の名所・旧跡はどこも歴史に興味を持つ女性のファンが増えているようです。在りきたりのガイドブックの説明では飽き足らずに、自分の五感を使い体験したこと



浦臼札的にある坂本龍馬家の墓



素晴らしい新十津川町開拓記念館

をフェイスブック等に投稿したりの連鎖が、さらなる歴女を生み出していると言われています。

この度の、研修ツアーの中にも歴女が“居ました！居ました” 車中では楽しいガイドもありました。バス旅行はやはりガイドがなきゃ寝てしまいます。坂本龍馬家の一族が浦臼の墓に眠っていることは初めて知りました。（もしも、龍馬が暗殺されなかったら、北海道開拓の先頭に立っていたかのしれせんね）最後に、今回のツアーを企画された幹事の皆さん有難うございました。

渡部孝次



## 10月分科会カレンダー

分科会名	日程	予定
文芸サークル・開拓使研究部	10月28日	「廃礦にて（渡辺淳一）」基調提言谷川会員
手稲石の会		
資料部	10月22日	資料整理